

教職科目「教職演習」実践に関する一考察

— 学生によるワークショップ型模擬授業の創造 —

A consideration of concerning teaching course
“seminar for teaching profession” practice
— Creation of workshop type practice class by student —

村 瀬 桃 子

toko MURASE

はじめに

「教職に関する科目」である「教職演習」での「授業の目的およびねらい」として、教育職員養成審議会での議論等を考慮し、筆者は金城学院大学の2008年度のシラバスに以下のように記した。

「現在、教師に求められている『資質能力』は、『地球の視野に立って行動するための資質能力』や、『変化の時代を生きる資質能力』であり、そのために教員養成段階でも、『実践的指導力の基礎を強固にする』ことが求められている。／そこで現在、主に学校で起きている子ども・青年の諸問題（学級崩壊・いじめ・不登校等）について教育学的な見地から深めるために、授業案の作成・模擬授業等を通じて、教師となるべき者としての研究能力を高める。これらを通して、自らの意見をまとめて表現する力を身につけ、さらに『演習』という形態を通して、学生自らが『演習』の運営をできる力をつける」。

以上のような「ねらい」をもって、筆者が金城学院大学で教職演習を担当し、現在の授業形態（前半は教員によるワークショップ¹⁾等、後半は学生による模擬授業に向けた準備と実践）になって3年になる。この「ねらい」

どおりに演習は実践できているのであろうか。そこで、過去3年の教職演習の実践を振り返り、今後の反省材料にしたい。

まず、授業の概要を述べ、次に前半の教員によるワークショップと、後半の学生による模擬授業を概観する。

なお、開講クラスは、文学部の日本語日本文化学科および英語英米文化学科の3年生で、開講期は後期（2単位）、例年1クラス15～30人ほどの規模である。

1. 授業の概要

例年の授業計画としては、第1回目はオリエンテーションを行い、第2～5回目に教員によるワークショップを、第5～7回で模擬授業のテーマの決定・グループ分け、ならびに授業に必要な文献資料の検索・大学図書館で資料収集を行う。以後、中間報告（第10回目くらい）をはさみ、各グループで授業案の討議・作成を行い、冬休み後の第13～14回目で模擬授業の発表を行っている。

前半の教員によるワークショップは、本演習の最後に行う模擬授業で、参加型・体験型の授業を作ってもらいたいという意図からおこなっている（ワークショップのテーマにつ

いては後述)。

後半は、特に近年重視されている「男女共同参画の中の教育」、「多文化共生と教育」、「環境問題と教育」等の社会問題を絡めた、参加型・体験型の授業案を学生が作成し、模擬授業を行っている。

模擬授業については、学生の興味・関心になるべく基づきグループ編成し、授業案を作成、最後にグループ毎に模擬授業を行っている。途中で中間報告を行うのは、進捗状況を把握するためと、授業をつくる途中で他者の目を入れることで客観的に授業を組み立てるためである。なお中間報告・模擬授業に対して、受け手側の学生はコメントを必ず書くようにし、そのコメント(匿名にする)は中間報告・模擬授業をしたグループに必ず目を通してもらう。

補足として評価方法についてであるが、授業における発表内容(20%)や討論への参加状況(20%)、模擬授業(50%)、出席状況(10%…毎回の授業の感想の提出に代える)によって概ね評価している。また、テキスト、教材、参考書等はなく、資料等は必要に応じて配布することとし、参考文献については授業中にその都度通知している。

2. 教員によるワークショップと資料収集の指導、グループ作り

ここでは、本演習前半の教員によるワークショップと、資料収集(文献検索)ならびにグループ編成について概観する。

(1) 教員によるワークショップ

筆者の研究テーマが性教育であることから、ワークショップの具体的なテーマは現代における性の問題に関する内容で、「デートDV」、「スクールセクシャルハラスメント」、「結婚とHIV」、「水の交換」(HIVの感染の広がり)というテーマで、計4回分を行っている。どの

ワークショップも、筆者のオリジナルではなく、小～高校のワークショップを取り入れた性教育実践をもとに、多少の変更を加え実施している。

「デートDV」のワークに関して参考にしたのは、竹内未希代氏の「性と暴力の問題を考える～デートDV」(愛知“人間と性”教育研究協議会宿泊研修, 2005.2, 於ウィルあいち)である。A子とB男の若いカップルのロールプレイを通して、当事者や周りの人たち(友人・親)の気持ちをグループで話し合い、考えさせた²⁾。

「スクールセクシャルハラスメント」のワークに関しては、杉村直美氏の実践「学校のセクシュアル・ハラスメント」(愛知“人間と性”教育研究協議会2002年6月定例会報告, 於生涯学習推進センター〔当時〕)を参考にしている。このワークも、性的な「からかい」を受けている女子生徒とそれをとりまく人々(友人・「からかい」をする男子生徒・教員)の気持ちや対処法をグループで考える、というワークである。

「結婚とHIV」に関しては、今井英夫氏の実践「授業プラン《HIVと結婚》」(愛知“人間と性”教育研究協議会2006年3月定例会, 於名古屋市女性会館³⁾)を参考にした。この実践に関しては、グループにしている年としていない年がある。また、仮説実験授業ということで、配布プリントが多すぎるという感想が毎年何名かある。

「水の交換」に関しては、西山美希氏(特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会, 詳しくは<http://share.or.jp/index2.html>を参照)の「効果のあるエイズ教育とは～シェアのタイでの取り組み～」(愛知“人間と性”教育研究協議会宿泊研修, 2004.2, 於名古屋クラウンホテル)を基に、柳富代氏が再構成した実践「小学校(高学年)エ

イズで学ぶ共生－ワークショップを取り入れた授業」（『季刊セクシュアリティNo.20』エイデル研究所，2005.4，pp.62-75）を参考にした。HIVの感染の拡がる様子を「水の交換」を通して疑似体験するというものである。この実践は、グループにはせず、受講者全員でおこなう。大学生でも比較的盛り上がるワークである。

これらのワークショップは、参加型・体験型の授業であると同時に発見型の授業でもあり、さまざまな問題を深く考える契機になるようこころがけた。

(2) 資料（主に文献資料）の探し方と中間報告

模擬授業のテーマを決め授業を組み立てるには、そのテーマについて深く知ることが必要不可欠である。そこで、学生が興味のあるテーマ（社会問題になっているテーマというしぼりはある）について、まず文献で調べるという作業をする。まず、OPACやCiNii等で検索して、どれくらいの文献があるかを調べる。学生たちは、膨大な文献からテーマをしぼらざるを得ないことを知ったり、逆に文献が見当たらず四苦八苦したりする。学生の感想からは、「本はネットとちがって、ピンポイントで自分のほしいと思っている情報がなかなかみつからなくて、でも、その分、他の情報も得ることができました」、「（テーマについて…引用者注）どこから手をつけたら良いのかわからなくて、文献検索が大変でした」、「資料は豊富だけど、それを授業でどのように使うかがこれからの課題」（以上は2008年度受講者）というように、資料を探して初めて気付くことが多い。このようにして大学図書館に行き、実際に資料を手にとって読み、確かな知識を得、さらにテーマを検討していく。こうしてグループ作りと並行して、テーマの限定や修正もおこなっていく。

テーマ決定とグループ編成の過程において、「いかに温和に話し合いをするかに頭を悩ませないといけないのがネックです。冷静に自分の意見を言うことが大事ですね」、「最初は脱線しまくっていたので、どうなるかと思いました（略）でも脱線した話も楽しかったので、今後何かに活かせるといいと思います」（以上は2008年度受講者）というように、意見の対立や時に脱線しながらもグループ内で様々な意見を交わし、模擬授業をよりよいものにしていこうとしていた姿がうかがえた。

中間報告では、テーマの説明や概略、現在の時点で考えている授業案の簡単な説明をグループ毎に行い、それに対して他の学生たちはコメントを書く。この中間報告により、そのテーマに関する素朴な疑問・質問から、批評、実際の模擬授業に対する具体的なコメント等、さまざまな角度から学生同士でコメントが出てくる。学生の感想の中に、例えば「みんなからの指摘を元に、作成することができました。とても参考になる意見ばかりでよかったです」、「指摘もよりいい授業になるように練り直すきっかけになったのでよかった」、「なかなか的確というかするどい質問が多く、自分たちが細かいところまで決めていないことに気付かされました」、「結構、辛口コメントもあり、指導案を作成していく中で、直していこうというふうにまとまりました」（以上は2008年度受講者）というものもあった。このように、模擬授業をする前に教員だけでなく、同じ学生の立場の者からもコメントをもらうことで、グループ内だけでは見えなかった点を認識し、以後の模擬授業作成に活かすことができたようである。

なお、なぜグループで授業案作りをおこなうかについては、意見を出し合い意思の疎通を図る、意見の対立があったとしてもグループ内で折り合いをつけながら協力する、とい

う体験，いわゆるコミュニケーション能力を少しでも身につけてもらいたいという意図からである。学生の中には、「意見がなかなかまとまりません。他の人の意見を取り入れつつ自分達の意見もまげないようにするのは大変です」（2008年度受講者）という感想もあり，グループ内や中間報告のコメントとの間で試行錯誤する様子がかうかがえた。実際，教育現場でも，それ以外の社会においても，意見の対立するような場面もあろう。グループでの授業作りは，集団で討議し，合意しながら進めていくという経験になったと思われる。

3. 学生による模擬授業

ここでは，本演習後半の学生による模擬授業と，それに対する学生のコメントを概観する。

(1) 学生による模擬授業

学生による模擬授業は，ホームルームや総合的な学習の時間等，専門の教科以外の授業を受け持つ時に，生徒たちに知ってもらいたい・伝えたい授業，特に「現代の社会問題」をテーマに授業を考えてもらっている。また，4回のワークショップで体験した参加型・体験型の授業を，実際の模擬授業になるべく活かしてもらっている。授業時間については，グループ数とコマ数との兼ね合いがあり，例年30～45分間と実際の授業よりも短く，今後改善すべき点である。中・高の免許状取得予定者であるので，対象は中・高生対象としている。

学生が取り上げたテーマは，以下の通りであった。

2006年度	児童虐待，少年犯罪，外国人の人権，いじめ，HIV，自分の言動は相手にどう伝わっているか，異文化理解，食生活
2007年度	食の安全性，電磁波（主に携帯），酸性雨の影響を知ろう，マンガの今と昔（主に性表現），少子高齢化，食品偽装，公共マナー，世界と日本の食糧問題，いじめ
2008年度	ケータイ依存症，ダイエット（拒食症），犯罪から考える人権（犯罪被害者・加害者），性の低年齢化，食の変化（栄養素），身近な危険から身を守る（性被害防止），食品問題，ワーキング・プア，出会い系サイトの危険性

以上の模擬授業のテーマをみると，近年の「食」の問題（「食育」の重視や「食の安全」等）に関するテーマが比較的多かった。また，携帯電話に関する問題，性の問題，いじめの問題も複数年度取り上げられているテーマであり，どれも世相を反映したものとなっている。

また，授業の方法や教材に関しても，ワークショップを取り入れる，プリントを工夫する，ビデオや写真，実物等視聴覚に訴える資料を用いる等，さまざまな工夫がみられた。

例えば，「食の安全性」というテーマ，「食品添加物の長所と短所について学び，判断する能力を身につける」というねらいで，生徒役の学生たちに「利き食」（学生による造語で，「食べ比べ」のこと）をさせるという授業があった。授業の流れとしては，市販されている食品（ポテトチップス〔うす塩味とコンソメ味〕，ジュース〔無果汁と濃縮還元果汁〕，クッキーとえびせんべい）について，「①どのお菓子をよく食べますか。○を付けましょう」「②体に悪いと思うものに○を付けましょう」と書かれたプリントを作成し，その理由を発言させ（ひっかけ問題で，えびせんべいの方が添加物に問題があり，クッキーと比べると体に悪影響），その後，食品添加物の長所と短所を説明し，補足として手作りのゆずジュースの作り方の説明と試飲をするというものであった。授業中に堂々とジュースやお菓子を飲み食いでき，また市販のジュース

スと手作りのジュースの味の違いを体感できたということもあり、盛り上がった授業であった。

また、「ワーキングプア」の模擬授業では、作業（箸で麦チョコを皿に入れる役＝正社員、箸でビー玉を皿に入れる役＝派遣）をし、報酬（おもちゃのコイン等で代用）をもらうのであるが、同じような作業（このワークでは派遣の方が難しい作業…危険であることも示している）をしても両者間の給料が違うこと、派遣社員はけがをして休んだ時の保障や仕事がない時には給料がもらえないなど、子どもにもわかりやすいワークを行った。このワークの後、最近のニュース映像等も加えてワーキングプアについて説明を行うという授業であった。

以上の例のように、全体として、参加型・体験型の模擬授業が多くおこなわれた。

（2）学生による模擬授業の評価

先述のように、模擬授業に対しては学生にコメントを書いてもらっている。コメントだけでなく、教員側が示した観点（「授業者の声や態度」、「わかりやすさ（教材など、効果的に使われているか?）」、「時間配分（短すぎたり、長すぎたりしていないか?）」）から、5段階評価（5～1で、5が最高点、平均4前後になる）もおこなう。

学生のコメントを見てみると、配布プリント（わかりやすさ、量等）、語句等の説明（わかりやすいか、読み違いがないか等）、授業の流れ（スムーズか無理があったか、早すぎ・遅すぎないか）、対象年齢の適不適、板書や掲示物の使い方、ワークショップ（設定、時間配分等）、生徒への対応や目配り（机間巡視等）、原稿を読むだけになっていないか、全体的に興味を持てたか否か等、受け手である「生徒」として、また授業者としての視点

でコメントをしており、教員が気づいた点をほぼ代弁している。

具体的なコメントを見てみると、先述の「食の安全性」の模擬授業に対して学生のコメントはおおむね好評だったが、中には「まとめの時間が短かった気がする。写すのに一生懸命になってしまって、説明などがよく聞けなかったのが残念」というコメントや、「ひとつ気になったのはプリントの書く所が少し多いということです。穴埋めにしたら良かったのでは、と感じました」というような具体的な改善案を示したコメントもあった。さらに「食品添加物が入っていない食品があまりなさそうで、気にし始めると、何も食べられなくなりそうなので、こわいなと思いました」という実感のこもったコメント（感想）もあった。

同様に「ワーキングプア」の模擬授業に対してもおおむね好評であったが、例えば「短い時間の中だったのでできることが限られていたかもしれませんが、（略）グループワークの幅がもう少しあってもよかったかなと思いました」というように、よりいっそうのワークの工夫を求めるコメントや、一方で「その日しのぎの生活、心が休まる時はないと思います。人の人格が全く尊重されていないなと感じました。今の苦しい現在をどうにか打破できないものかと考えさせられました」というように現状の社会へ目を向ける者もいた。

おわりに

学生がおこなった模擬授業に関しては、総じてユニークでよく工夫されていると評価できるだろう。学生の中には、すでに他の教職の授業で模擬授業をおこなっている者もあるが、本演習での模擬授業は専門教科ではなく、しかも体験型・参加型の授業をつくるという点で準備にかなり時間がかかること、グルー

プ内での意思疎通を図ることの難しさなど、実際に授業を作る中で体感できたのではないかと思う。

しかし、授業の「ねらい」として掲げた、教師としての研究能力を高め、自らの意見をまとめて表現する力、演習の運営能力（換言すれば自治能力）が、どの程度到達できたかといえば課題は多い。

例えば、運営能力という点で、模擬授業を作るまでの経過を見てみると、教員の手をほとんど借りずに毎回熱心に取り組んでいたグループが大半であったが、そうとはいえないグループもあった。また、研究能力を高める・意見をまとめて表現するという点に関して、一見、模擬授業がうまくいったように見えてもメンバー全員が取り組めたとは言えないグループもあり、資料収集や教材の工夫等で一部の者に負担がかかっていたり、リーダー的な学生に引っ張られるだけの者もあった。今後、受講者全員が能力を高められるようなグループ活動をいかに機能させるかが課題である。

なお、本来ならすべてのグループに模擬授業の時間を最低50分間は保障すべきであるが、先述のように授業時間やコマ数との関係で短縮せざるを得ない場合の方が圧倒的に多かった。さらに模擬授業後についても、時間の関係上、教員と学生のコメントをコピーし渡すだけになっており、フィードバックも十分とはいえない。この点についても今後の課題である。

注)

- 1) ワークショップとは、「仕事場。作業場。」という意味とともに、「所定の課題についての事前研究の結果を持ち寄って、討議を重ねる形の研修会。教員・社会教育指導者の研修や企業教育に採用されることが多い」（『広辞苑（第五版）』）、「参加者が自主的活動方式で行う講習会」（『大辞泉』）と

いうもので、答えを出すというよりも、参加者が協同して一つの課題を話し合ったり考えたりする過程を大切にする。

- 2) なお、このワークショップの元は森田ゆり『ドメスティックバイオレンス』（小学館、2001.8）を参考文献としている。
- 3) 詳細については今井英夫「性の授業実践（高校）仮説実験授業『HIVと結婚』」『季刊セクシュアリティNo.27』エイデル研究所、pp.90-95、2006.7を参照。